
考えろよ。

回収屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

考えるよ。

【Nコード】

N2973Z

【作者名】

回収屋

【あらすじ】

新薬開発のコンサルタントと軍用兵器の設計を専業とし、世界規模で展開する国営企業・『PFRS』パフリス。そこから逃亡した蒼神槐あがみ えんじゅは、PFRSが隠蔽するバイオハザードを告訴しようと試みるが、ヒットマンの強襲により失敗。彼は最後の手段として、調査会社のエージェントを伴ったの敵地潜入を画策するが、依頼を受けてやって来たのは何故か……明らかに拳動不審な二人組の少女だった。

『神の設計図』バイタルズと呼称される遺物をめぐり繰り広げられる、政府と軍部とPFRSの三つ巴。その中で葛藤する青年・蒼神と、彼を

取り巻く不確定要素達の攻防……+「ああ〜、やっぱり美青年の尻はええのう」「ダメよツ、オマワリさんが見てる!」

ネットに消えた学説と護衛される青年（前書き）

世界中で大ヒットしたアニメ映画「攻殻機動隊」などの監督、押井守さんが現在のアニメ作品について「オタクの消費財と化し表現の体をなしていない」と批判した。

ネットではこの発言に納得する人もいるのだが、自分達の好きなアニメを批判していると感じたアニメファンは「押井こそオワコン」となどと押井さんに対する盛大な批判を展開している。

ほとんどのアニメはオタクの消費財と化した

朝日新聞は2011年11月21日付けの電子版コラム「アニメゲ井」で、押井さんの東京芸術大学大学院映像研究科での講演（1月12日開催）を紹介した。講演で押井さんは

「僕の見る限り現在のアニメのほとんどはオタクの消費財と化し、コピーのコピーのコピーで『表現』の体をなしていない」

と語ったという。つまり、制作者には新たな創造性や、作品を通じて訴える思想的なものが欠如し、過去にヒットした作品の焼き直しばかり。例えば「萌え」が流行すればそうした作品ばかりになっている。また、今のアニメはオタクと呼ばれるファン層に媚びたものが多く、ことうしたことから「表現」が制作者から無くなった、という批判だ。

確かに11年9月から始まった20本近い新作テレビアニメを見ると、さえない男性主人公の周りに美少女が群がる「ハーレムアニメ」が驚くほど多く、過去にヒットした「ハーレムアニメ」作品と共通する内容がかなり多い。

宮崎駿監督も過去の作品のコピーに嘆いていた

実は、過去のヒット作品を真似たものが増えていることについては、以前から警鐘が鳴らされていた。宮崎駿監督はベルリン国際映画祭で「千と千尋の神隠し」が金熊賞グランプリを獲得した02年2月19日、記者会見を開き、記者から日本アニメの世界的な地位を質問されると、「日本アニメはどん底の状態」とし

「庵野が自分たちはコピー世代の最初と言っていたが、それより若いのはコピーのコピーだ。そうしたこと（アニメ業界が）どれだけ歪んでいて薄くなっているか」

などと答えている。庵野というのは大ヒットアニメ映画「新世紀エヴァンゲリオン」の庵野秀明監督のことだ。

今回の押井さんの発言についてネットでは

「萌えクソアニメの乱発は誰が見ても異常」

「アニメ業界が飽和しすぎて、コピー品を粗製乱造しなきゃ回らなくなってる」

「売らなきゃ食っていけないからな。安定して売れるのがオタク向けの萌えやエロ」

などと納得する人もいるのだが、現在主流となっているアニメのファン達は、自分達の趣味趣向、好きなアニメを批判するのは許せない、と激しく反発。しかし理論で立ち向かえないからなのか

「押井のアニメくそつまんねーんだよ」

「押井も信者向けの消費財じゃん」

などといった作品批判や、人格批判へと発展し、大混乱となっている。

この記事は、『小説家になろう』における作品の傾向にも該当します。“異世界”・“主人公最強”・“転生”・“ハーレム”・“チート”……オリジナルも二次創作もこの手のタグであふれかえっています。

アニメもラノベも観てもらってナンボ、読んでもらってナンボ。それは事実です。が、作品のファーストフード化に回収屋は食傷気味です。ちよつと考えてみましょう。アナタはより良い味を求めてハンバーガーや牛丼を食べに行きますか？ そう、まずあり得ません。ただ単純に安くて手っ取り早く、口当たりの良い刺激が欲しい場合の効率的な手段として選択されているのです。まさに『消費財』です。食べたその瞬間は確かにある一定の満足感が得られますが、店を出た直後には味の記憶など脳から消えます。作品も同様……どこかでよく目にするファクターに誘引され、その時は満足感が得られます。しかし、人から「で、どのシーンが一番感動した？」「ストーリーのあらすじを教えてください」などと聞かれた際、どこまで答えられるでしょうか。正直、難しいでしょう。消費者は既に欲しかった刺激を消化し終え、また次の新しい安定した刺激を求めているのです。そこには作品を楽しんだという“記録”はあっても“記憶”はありません。

二次創作で一本完結させている回収屋が述べるのもなんですが、自分の作品構築のためにプラスとなるオリジナルに触れてみたい……常日頃から思っています。

二次創作にしか興味がない読者様をガッツリと矯正させる意味でも、今回の作品を披露していきたいです。

ネットに消えた学説と護衛される青年

『惑星自壊説』 今世紀初頭、ネットのとある科学サイトに発表された学説。仮説の域を出ない突拍子もない理論であったため、当時は一部のカルト的な支持者しかいなかった。38億年前、地球上に1個の隕石が落下。隕石に含まれていたアミノ酸を素に、原始生命が発生する。あらゆる気象条件下で化学反応を展開し、次々と新しい生命が創り出されていった。彼等は最初、ごく単純な遺伝情報しか有しておらず、他の生命を食らって取り込むことにより、複雑なDNAを構築し進化していった。地球という温床の中で、何億年もの間その行為は続き、新生しては滅びを繰り返す。それは自然の法則に完璧に則った現象であり、地球はただじつとその永久不滅のサイクルを見守っていた。そこで……地球は思った。

『死』とは何だ？

惑星は巨大な一個体の生命であり、いわゆる『意志』を持つとされる。が、その意志はあまりに不完全で、死に対する不安や恐れを理解できていなかった。地球は自らの破壊力を行使し、5度も大絶滅を繰り返したが、どの手段も決定的なダメージを与えるには至らず、地球の意志は不完全なままだった。しかし、彼には時間があつた。あり過ぎた。だから永い時を経て考えた。

ダレかに殺してもらえばいい

最後にとられた手段こそが『人類』だった。現生人類は、およそ20万年前に一つの独立した種として出現した。殆どの生命体が自然環境のサークルに解け合えるのに対して、人類だけが進化の過程

でサークルから外れていった。異常なスピードで脳髓を発達させ、爆発的に増殖し、生態系のピラミッドを決定づけ始めた。海洋を汚し、大気を濁らせ、大地を腐らせ、他種を滅ぼしだした。このことから引き出された一つの結論……

<『人類』とは、地球が自らを滅ぼすために創り出した『生体兵器』である>

この学説を発表した科学者は、マスコミの前には一度も姿を見せず、ネット上のみでのゲリラ的活動を繰り返し、ひたすらこの学説の危険性を主張していた。このままでは近い将来、確実に地球の自壊は成功してしまう。地球は人類を作為的に進化させて、より優れた遺伝情報の所有者を生成している。20万年近くかけた計画が最終段階に入っている。名を明かさず、顔も見せず、ひたすらネットの中で声を上げるその科学者は、新興宗教の教祖の如き扱いを受けていた。この小さな騒動が、一般メディアにも取り上げられるようになった時分の1ヶ月ほど前……：日ノ本の本土から遠く離れたところある海域にて、局所的な海底火山が発生。それにより生じた巨大な海底の亀裂から、正体不明の遺物が発見された。それは 『人型』。回収し検査した当時の国家調査室が出した回答……

<全長170センチ・重量80キロ。材質は不明。人間の造形に酷似しており、体表面は透明で、内部構造が肉眼で認知できる。骨格・筋肉・臓器・神経・血管……その全てが人型容器の正しい位置に形作られ、電子顕微鏡を使って初めて確認できるような、微細な組織まで設計された『完全な人体設計図』>

最も奇異とすべきは、その人体設計図が出土した海底の地層の年代。測定した結果、その遺物は現生人類が生じるよりも以前のモノと断定された。この遺物は『神の設計図』^{バイタルズ}と名づけられ、国家調査

室は情報規制法案を立ち上げてハッキング防止対策を施し、回収にあたったサルベージ班には情報機関の監視がつくほどだった。ネット上を騒がせた科学者が、この一件と何だかの関係があるのでは…そんな噂が囁かれた。しかし、国家調査室のハッキング対策により、問題の科学者も息を潜めだし、次第にその存在はネット社会の記憶から消えていった。そして

20年が経過した。

一人の青年が刑務所の中にいた。数名の私服刑事が周囲をウロウロしているが、特に張り詰めた感じの空気でもない。30坪程の広さがある一室で、その青年はソファに腰掛けて両手を組み、何かを心配するような面持ちでうつむいている。

「どうぞ楽にしてください。我々がついていますので」
刑事の中でも一際貫禄のある初老の男が声をかけてきた。そして、コーヒーの注がれた紙コップをその青年に差し出した。

「ええ……分かっていきます」
そう言つて紙コップを受け取る青年の顔には、明らかに疲労の色が濃く出ていた。歳の頃は20代前半くらいだろうか、まだ少々幼さが残るその顔からは、何かに怯えるような落ち着きの無さが見て取れる。

「あの……ちょっとトイレに」
「ええ、どうぞ」

この部屋に出入り口は一つ。コーヒーを差し出した初老の刑事が、出入り口の側に立っている若手の刑事に目配せする。ドコへ行くにも護衛がつく。刑務所の中なのだから当然の処置なのだろうが、見知らぬ複数の人間に、四六時中まとわりつかれるのはカナリのストレスになる。『インペリアム』と呼ばれるこの刑務所は、一般の犯罪者収容施設とは異なり、犯罪に巻き込まれてしまった被害者や、大物犯罪者を摘発するのに重要な役割を果たす証人を保護するため

の隠れ家。国家調査室の直轄で、軍施設並みにセキュリティレベルが高い。

「ボクの証言で本当に解決するんでしょうか……?」

部屋に戻った青年がボソツと呟いた。

「もちろんです。我々に全て御任せください」

何とも冷静に言ってくれるが、言うのは簡単。問題は結果だ。

「明日の段取りは?」

「法廷には朝9時到着予定ですので、7時半にはここを出ます。そろそろ休まれますか?」

「……そうさせてもらいます」

と言っても、寝室が別に用意されているワケではなく、ソファに横になるだけ。そんな生活が既に5日も続いている。

「それではまた明日」

初老の刑事は、出入り口にずっと立っていた若手の刑事に一通りの指示を出し、他の刑事達と共に部屋を後にした。

「……………」

窓一つ無いこの収容施設に閉じこもっていると、昼と夜を区別する感覚が日増しにおかしくなってくる。テレビや新聞に目を通して一日の経過を知るが、外出できないままだと、まるで世界から追いつ出されたような違和感が生まれる。

「もつ少しの辛抱ですよ、蒼神博士^{あがみ}」

青年の心境を読み取ったのか、見張りとして残った若手刑事が、照明の一部を落としてながら声をかけてきた。

「……宜しくお願いします」

『蒼神博士』と呼ばれた青年は、ペコリと小さく頭を下げ、毛布をかぶって横になった。

「……………」

静かだ。あまりに静かだ。雑音が一つも聞こえないと、逆にその静寂が耳障りになるくらいだ。

(よそう……今更考えても遅い)

視界が暗くなる。目を閉じる。眠気が……………

フォンフォンフォンフォン！！　フォンフォンフォンフォン！！

「……………！？」

一匹目の羊が柵を越えようとした瞬間、けたたましい警報が鳴り響いた。見張りの刑事はホルスターに手をかけ、青年はソファから飛び起きた。

「な、何が……………！？」

「……………分かりません」

バタバタバタバツツ！

出入り口の向こう側から複数の足音が。刑事がホルスターから自^オ動拳銃を抜く。

「博士ツ！」

扉のコンソールが点滅してロックが解除され、さつき出て行ったばかりの刑事達が慌てて雪崩れ込んできた。

「主任、何事ですか！？」

「敷地内に不審者の侵入を確認した。相手は一人だけだ」

「敵襲ですか！？」

「分からんが……………もしそうならとんだマヌケだ」

「刑事さん、ここにいて大丈夫なんですか？」

青年が怯えきつた声で問いかける。

「大丈夫もなにも、インペリアムにおいてこの部屋が最もセキュリティに優れているんですよ。心配ありません」

そう言って他の刑事達に指示を出し、素早く配置につかせる。

「テレビをつける。監視カメラとチャンネルを合わせるんだ」

若手刑事がモニターを調整すると、監視カメラの映像が映し出される。正面玄関口、事務室、医務室、屋上、中庭……………発見。

「何だありゃ？」

中庭をモニターしているカメラの映像に、不審人物が映っている。

ライトアップ用の照明が強すぎて顔はよく見えないが、どうやら女のようなようだ。体にピツタリと張り付くようなボディスーツを装着し、そのうえ裸足。不審尋問を受けても文句の言えないような格好だ。どうやって中庭まで侵入したかは不明だが、モニターの女は何かを探すかのようにキョロキョロしている。

「こちらセクション・C、モニター室応答しろ」

刑事主任が無線機で呼びかけた。

<こちらモニター室。そっちは異常無いか？>

「今の所はな」

<機動部隊が全員配置についた。コスプレまがいのイカレ女の方は、まだこちらの動きに気付いていないようだかな>

「結構。絶対に殺すなよ。貴重な情報源になるかもしれん」

主任が北叟笑む。その直後

<蒼神博士えええええええ

！！ ドコにいるのおお

おおおお

！？>

豪胆なのかバカなのか、女はターゲットの名を大声で喚く有様だ。その声は監視カメラのスピーカーを通して、青年のいる部屋にもハッキリと聞こえてきた。

「そんな……何てことを！」

名を呼ばれた本人が、口を半開きにしてたじろいだ。

「知っている顔ですか、博士？」

「い、いえ……そんなハズは……」

ピピッ、ピピッ、ピピッ

刑事主任の無線機が鳴る。

「準備万端か？」

<いつでもいける>

主任は無線機を片手にモニターを凝視して……

「よし、制圧開始ッ！ー！」

ゴー・サインが出される。同時に警棒やライフル銃を持った機動隊員十数名が、建物の窓や物陰から躍り出て、侵入者の周囲を取り囲んだ。

<そこを動くなッ！>

<早く腹這いになれッ！>

<武器は持っていないかッ！？>

スピーカーから機動隊員の喧騒が聞こえてきて、目標の女不審者があつという間に制圧されたかのように思えた。

「……………」

瞬きを忘れ、真剣な目でモニターの様子を見つめる蒼神博士が、ゴクリと息を呑む。

<うわッ、びっくりしたああああ〜！ アンタ達ダレよッ！？>

女不審者が自分の置かれている立場を無視し、無責任なセリフを叫ぶ。

<そりゃこつちのセリフだ！ 政府施設への不法侵入の現行犯で逮捕する！>

機動隊員の怒号がとぶ。

<蒼神博士ええええ〜！！ 聞こえないのおおお〜！？>

機動隊員の指示に一切従うことなく、またもや大声で青年の名前を呼ぶ始末だ。

「何だコイツは…………？」

あまりのマヌケな状況に、モニターを見つめる刑事達も呆れ返っている。

<いいかげんにしろッ！>

業を煮やした隊員の一人が女を捻り伏せようと、その肩をつかもうとした瞬間……

ブワッ

！！

隊員のでかい図体が宙に浮いて、背中から勢い良く地面に落下す

る。

<触らないでよ、バカ!!>

隊員の胸ぐらを片手でつかんで無造作に投げたのだ。女性の腕力とはとても思えない。

「抵抗するなッ！」

警告すると同時に、警棒を構えた隊員二名が左右から挟みこむようにして襲いかかるが、女はその場から一步も動かず、上半身を器用にひねって二本の警棒をかわすと、両の拳を裏拳気味に相手の顔面へと叩き込んだ。

「おいおいッ……!？」

拳を喰らった二名は鼻血を吹いて崩れ落ち、モニターで観戦する刑事達に不愉快な緊張感がはしる。

「大人しくしろッ！ いいか、これは最後通牒だッ！」

今にも発砲したくてウズウズしている銃口が女不審者に向けられ、スコップサイトのレーザーが目標の急所を集中的に這っている。

<うるさいなあッ！ 早く蒼神博士を殺して帰らないと怒られるのッ！ だからオジサン達邪魔しないで >

バンッッッ

!!

発砲。

「……やったか？」

モニターを見つめる刑事主任が画面にググッと近づいて目をこらす。

「ん……?？」

様子がおかしい。

「何だ？」

女の上半身が大きく後ろに仰け反って、曲がった釘のように固まっている。

「どうした？ 命中したのか？」

刑事主任が無線で問う。

<分からん……少し待ってくれ>

ライフルをしっかりと構えた隊員数名が、合図を受けて駆け足で女に近づき、十分に警戒しつつ様子をうかがう。

「どうなんだ？」

<あゝ……こりゃヒデえ。貫通してないところを見ると、一応、防弾処理のされたボディスーツのようだが、胸元がえぐれちまってやがる>

「死んでいるのか？」

<この体勢で生きてたらコントだ>

「よし、検死官に委ねて身元を調べろ。わずかでも法廷で使える情報があれば」

ヒュッ

<う……ッ……!!>

女の変死体が突如、上半身を360度ひねって元の体勢に戻った。同時に、無線機から呻き声のようなものが聞こえ、取り囲んでいた隊員達もがくように倒れ伏した。

「な、何事だッ!？」

動揺する刑事主任が見たのは、女の両手にしっかりと握られた『刃物』。刃渡り30センチほどのシースナイフが二本……照明に照らし出されてキラキラと光っている。

「ひッ」

明確な殺傷能力を目にした蒼神博士が、顔を引きつらせた。

<痛いなあッ！ 危ないじゃんッ!>

ライフル弾の直撃を受けて素直に感想を述べている時点で、尋常な相手ではない。

パンッ！ パンッ！ パンッ！

残る隊員達は指示を待つこともなく本能に従って拳銃で応戦する。
<こんにやる!!>

女の方はそれに応えるかのようにナイフを構え、機動隊めがけて
跳びこんでいく。

「なッ!?!」

思いもよらない展開に、モニターを凝視する全員がマヌケ面で口
を半開きにしている。

「主任……我々はどうします?」

「何もするな」

「……は?」

「籠城だ。ここでやり過ぎす」

「し、しかし……」

スピーカーからは、あまり聞きたくない隊員達の断末魔が聞こえ
てくる。

「我々の仕事は、あくまで蒼神博士を無事に法廷へ送り届けること。
避けられるリスクは極力避ける」

モニターの隅の方で血飛沫が上がっている。銃声は鳴り響いてい
るが、隊員達の叫び声は止まらない。

「応援は!?! ここは刑務所でしょ!?!」

蒼神博士が必死の形相で最もな質問をする。

「残念ながら……このインペリアムは囚人を収容する一般のソレと
は違い、最小限の刑務官で維持されています」

「つまり……外部からの応援が到着するまで、身動きできないとい
うことですか?」

「申し上げにくいのですが、その選択肢もありません」

「な、何故です?」

「重要な証人を確実に保護するためには、情報の漏洩を極力避けな
ければなりません。そのため、外部との連絡手段はモニター室の端
末からしかできません」

「でしたらすぐ、モニター室の担当者に連絡をッ」

「担当者は……現在、モニターの中で死んでいます」

画面を指差され、絶望感が一挙に湧いてきた。

「そんな、バカな……！」

蒼神の顔色がみるみる青ざめて、イヤな汗が額をじつとりと濡らしている。

「この状況下で言うのもなんですが……どうか落ち着いてください。ここは絶対に安全です」

刑事主任は部下達の手前もあってか、冷静を装ってはいるが、籠城というのは想定外だった。が、彼は仕事の関係上、この部屋について熟知していた。

「この部屋の外壁には、原子力発電所で使用される防護壁と同じ物が用いられています。たとえば大型航空機が時速100キロで突っ込んできても、防ぎきるだけの強度を誇ります。つまり、侵入者がライフル銃を奪って撃ち込んだとしても、微動だにしません」

彼の講釈を聞いて部下の刑事達に安堵がもどる。

「それはそうと……博士、心当たりはないんですか？」

「あ、う……」

ターゲットの名前を力一杯叫んで登場するような危険人物……そんなヤツと知り合いとは言いたくないだろうが、状況からある程度の予想はついていた。

「どうなんです？」

「お、おそらく、アノの女性は……」

ガギャン

ツツツ!!

「ッ!?」

聞きたくもない剣呑な音がして、部屋の中の全員が一点を見つめた。つい先程説明のあった、特別な防護壁から何かが“生えている”。そして……

「ツツツッ！！」

ドゴオオオオオオオオオオオ
ツツツッ！！

とてつもなく力のこもった一声と同時に、防護壁の一部が積み木のように内側へ抜き出される。立ち上る粉塵……その中を人影が一瞬揺らめく。最早、主任の指示を仰ぐ必要はない。

パンパンパンッ！　パンパンパンッ！

9ミリ弾が粉塵めがけて次々と撃ち込まれ、弾が命中する度に人影がゴム人形のように弾む。

「博士ッ！　さあ、早くッ！」

扉のロックが外れる。

「ゴ、ごめんなさい……ボクは……」

「アレっ？　蒼神博士の声がした」

（　　ッ！？　）

少女のような幼さの感じる声がして、『敵』はその威容をさらけた。年の頃は20代半ば程で、浅黒い肌をしており、染めてあるのか地毛なのかは不明な白髪のみディアムカット。

「あ、博士がいた。じゃあ、すぐに殺しちゃうね」

本人を前にして、屈託の無い笑顔でサラリと宣告する。彼女の表情には何の意図も感じられない。外部から受けた刺激に即反応する昆虫のようだ。

「フ、フリージア……どうして君が、こんな……？」

面と向かって“今から殺します”と宣言する女を前にし、彼の脚は笑っていた。

「畜生がッ！」

パンッ

！

彼等と不審者との距離はわずか。刑事主任の撃った弾が外れる八

ズもなく、『フリージア』と呼ばれた女の喉を貫通した。

「げほッ！ げほッ！」

首に紅く小さな華が咲き、女は激しく咳き込んで辺りに血をプチ撒ける。

「やった……」

首に銃弾の直撃を食らって倒れないのなら、相手は間違いなく人とはみなされない。そして、彼等警察にそんな“人外”の相手など務まりようもない。

「うええええ〜、喉が痛あ〜い……けほッ（泣）」

まるで小児科の待合室で痛がる子供だ。もちろん、倒れる様子はない。要するに“人外”決定だ。

「くっそおおおおおおおおおッ！！」

主任、激昂。

ヒュッ ヒュッ ヒュッ

光刃。

「パパがね、博士を殺せって」

ドサツドサツ、ドサツ……

総殺。

「そ、そんな……『支配人^{オーナー}』がボクを？」

「うん、殺してきなさいって。でもね博士……“殺す”ってどうすればいいの？」

幾つもの斬殺体を積み上げておきながら、根本的な質問をされた。博士の表情が恐怖とはまた別の感情で曇る。それは相手に対する哀れみのようにも見てとれた。

「フリージア……君の足元に倒れ、血を流して動かなくなった人達がいるだろ？」

「うん、いるよ」

「これが人を“殺す”ということなんだ」

彼はとっても大切な事を教えていた。女は自分の足元に転がる刑事の死骸を、足のつま先で突つつく。もちろん、反応は無い。初めて目にする生き物を観察するような女の目つき……その瞳は瞬く間に潤む。

「は、博士え、博士え……動かないよお！ 何にも言わないよお！」
女が泣き始める。刑事達の死を完全に無駄にする涙がボロボロ流れ出る。

「そう、これが“死”だ。フリージア……君がしたことだ」
彼は泣き出す女に対して、とどめをさすかのように毅然と言い放った。

「うっ……うっ……うわああああああああああん！！」
号泣。

「博士が死ぬのやだあああ〜ッ！ 殺すのやだあああ〜ッ！」

とうとうその場にしゃがみこんで泣きじゃくる始末だ。

「フリージア、こっちを見て」

そう言っただけ博士はその場にゆっくりと体を沈め、何の脈絡もなく倒れこんで動かなくなった。

「……博士？」

唐突な出来事に泣くのをやめた女は、鼻水をすすりながら彼に呼びかけた。

「……」
「が、応答は無い。」

「し、死んじゃった……博士が死んじゃった……！！」
女の顔色がみるみる青ざめる。冷静に状況を把握できていない彼女にとって、目の前で起きた現象は、あまりに残酷な仕打ちにも見て取れた。

「……」
本物の死体に混じって、偽物の死体を演じることとなった蒼神は、ただじつと息を潜めて成り行きに身を委ねるしかなかった。

「ひぐつ……博士が、ひぐつ……死んじゃった。フリージアが……殺しちゃった(泣)」

ペタペタペタ……

裸足で歩く悲しげな足音を残し、彼女はついさつき自分が突貫させた壁の穴から出て行った。

「……………」

嵐が 去った。が、青年はまだ動けそうにない。

(どういうつもりだ？ 彼女を外に出すなんて……)

大勢の人間が死んだ。自分が成そうとしたことに協力した人達が犠牲になってしまった。既に危機は去っていたが、彼の肉体はあまりに軽く失われる人命の現実に蝕まれ、しばらくは動けそうになかった。そして……

1週間後

一人の青年……『蒼神槐』あがみ えんじゅは自宅マンションのリビングで悩んでいた。刑務所で起きてしまった大惨事をきっかけに、蒼神博士は法廷での証言を拒否。それより以後、彼の周囲は静かになった。直接的な警護をする者はおらず、一日に数回、パトカーがマンションの周囲を巡回するくらいだ。

(ボクのしようとした事は、間違っていたのか?)

彼はPCのモニターを見つめながら自問した。法廷に立つと決めたのは、己の正義に迷いがなかったから。では何故、今の自分は証言を拒否し、自宅に引きこもっているのか？ 全てが無駄になってしまった。なんとも単純な計算だ。

“個人が組織に勝てる道理は無い”

ただ……ただ一つだけ考えがあった。公の場で社会的な楔が打ち込めないのなら、非公式の場で攻撃する。つまり、原告本人が直接調査に乗り出すのだ。ただし、単身乗り込んだりすれば、自滅することは目に見えている。先日のような事例がある以上は『護衛』が必要。そこでどうする？

(そろそろか……)

彼は時計を見て、胸に秘めた微かな期待を膨らませていた。『イレギュラー』 ネットで発見した調査会社のサイトだ。TOP項目にはこう説明されていた。

<個人を対象とした総合調査会社。警察OB・元軍人・情報機関出身者等で組織され、企業やそれに付属する団体、宗教組織、暴力団等からの警護、または直接的及び間接的な調査を目的とした、自治体公認の企業>

……とある。一般のメディアでは聞いたこともない社名だったが、自分がこれから相手にしようとしている連中の事を考慮するならば、備えは必要。

ピンポーン

来た。

この瞬間から彼の反撃が開始される。昨晚、腕利きのエージェンツ二名をよこすとメールがあった。なんとも心強い。どんな屈強な男達が来てくれたのか。

ガチャ！

「……………」

「……………」

ミンミンミンミン！

街路樹でセミが鳴いている。ドアの向こうに看護婦と医者が立つ

ていた。

「……………」

「……………」

「ミーンッ！ ミーンッ！

状況が上手く説明できないが、目の前に白衣の天使と女医が立っている。

「……………」

「……………」

「ミンミンッ！ ミーンッ！

三人はいつまでも見つめ合っていて、何もしゃべらない。

「……………」

「……………」

「ボタンッ！

蒼神博士は仕方ないんで玄関戸を閉めた。力強く閉めた。

「ドンドンドンッ！ ドンドンドンッ！

「すみませーん！ 『イレギュラー』から派遣されたモンです！

「ウソじゃないですよー！ 社員証もありますから開けてくださー

い！

「ドアを叩きながらそう言ってるもんで、彼はもう一度開ける。

「……………」

「……………」

「無言。

「無言。

看護婦の方がラジカセを持ってる。再生ボタンを押した。流れてきたBGMは『ラジオ体操第一』。

「ボタンッ！

閉めた。

「わーッ！ 待って、マジで待って！ こっから真面目だから！

ホントに真面目だから！」

「ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！

このまま放っておくと玄関戸の前でいつまでも叫んで、御近所から身に覚えの無いウワサが出そうなんです。

ガチャ

「とつとと入ってください」

彼の戦いが始まった。

ナースと女医

＜速報です。昨今懸念されていた政府直轄の国営企業、通称『PFRS』で発生したとされるバイオハザードについて、PFRS側は「事故が起きたという事実は無い。職員による誤報である」と、変わらず事故を否定。政府は来週にもPFRSの幹部立ち会いのもと、公式調査を実施すると発表。今回の調査では……＞

テレビが昼のニュースを放送している。蒼神博士はリビングのソファに来客者二名を座らせると、冷茶を一杯出してやった。

「あの〜……一つ聞いていいですか？」

「はい、どうぞ」

「その格好は何ですか？」

ものすごく切実な質問を試してみた。

「看護婦です」

「女医です」

呼称についてはどうでもいい。

「……どうしてそんな格好を？」

「趣味です」

「右に同じ」

ダメだコイツ等。

「これ、社員証です」

そう言っつて偽ナースが、顔写真付きのカードを一枚取り出して見せた。

「イレギュラー調査課エージェント・『汐華咲』さん？」

「はい、今年で18歳になりましたッ！つまり、ポルノ解禁ッ！ポルノ解禁はどうでもいいが、未成年がこんな仕事していいのか？」

「こちらもどーぞ」

女医も社員証を手渡した。

「イレギュラー調査課エージェント・『かしわぎ柏木茜あかね』さん？」

「はい、咲チヤンとコンビを組んでる19歳ッ！ コスチュームは手作りですッ！」

そう言つてニツコリ微笑んでいる始末。

「え〜〜……すみません、ちよつと確認しておきたいんですが……メールには“信頼のおけるベテランを派遣します”と、返信があつたんですけど」

「そうは見えないと？」

「ええ、まあ……」

「はい、確かに。嘘メールですから」

ぎゃあああああああああああああッ！！

「そ、それつて詐欺じゃないですかッ！」

「申し訳ない！ あたし等どうしても仕事が欲しくて！」

「上司のPCで海外のエロサイト観てたら、偶然、蒼神さんのメールが届きましてエ。これはチャンスとばかりに……あはははははははッ」

決して笑い事ではない。

「ちよつと電話してきます」

「待つてくださ い！！」

おふッ！？

席を外そうとする博士めがけて、看護婦と女医がタツクルしてきた。

「嘘ついた事は謝ります！ あたし達はただ、デスクワークとサヨナラして外に出たかっただけなんです！ この支配からの卒業なんですー！」

言つてるコトは全く理解できないが、どうも面倒な話になつてきた。

「もしかして……御二人は新人？」

「いえ、入社して2年近くになります。けど、調査の仕事はこれが

初めてです」

「……はい？」

「エージェントのライセンスは持つてゐるんですが、補欠なんです」

「そーなんです。ギリギリなんですウ」

えらいコトになつてきた。しかし、今ここで追い返そうとすれば、「大声出して人を呼びます」と言わんばかりのツラなんで、黙認するしかない。

「そ、それでは改めまして……蒼神槐です。宜しく御願ひします」
彼はそう言つてテーブルの上に書類の束を広げた。一番上には証明写真の貼られた博士自身の履歴書が。

「なんとツ、このツラで23歳！？ てっきりあたし等とタメぐらいかと！」

「身長は？ 体重は？ 血液型は？」

ワイワイ、ガヤガヤ……

二人は履歴書の写真を指差し笑つて、肘ついて。文句言つて寝転がつて、屁えこいたりで相談中。

(……これでいいんだろうか？)

宜しくない汗が博士の顔面より吹き出す。なんだかもうヤケクソまで秒読みだ。

5分後

「んツ！ よし、決定！」

「な、何がですか……？」

「本日より『童顔ニート』と呼びます」
ニックネームが出来た。

「い、いや……そんなことよりですね、ええっと……そうだ、テレビを」

仕事の話が微塵も進みそうにないんで、彼はPCをテレビにつな

ぎ、モニターを見るよう促した。

「職歴に記されてある通り、ボクは『PFRS』本部の元職員です。PFRSで現在起きているバイオハザードについては、御存知ですよね？」

「知らんツ！ あたしは基本的に深夜アニメしか観ないツ！」
ナースがやたら偉そうに胸を張って返答する。

「コレって確か……海の上にある如何わしい施設で、マスコミにボコボコにされてる秘密組織だよ」

微妙にズレてはいるが、女医の方はまだ常識があった。

「ボクは1週間前、PFRSに対して法廷で証言するハズでした。あそこで一体、何が起きているのか、一部始終を世間に公表するつもりだった……しかし、挫折しました」

「さあてえ、な〜にがあるかなあ？」

ガチャ

クライアントが真剣に話し始めた途端、ナースはキッチンめがけて這い出して、冷蔵庫のドアを勝手に開けたりしてる。

「ボクは一介の科学者に過ぎません。軍部とも繋がりのあるPFRSと本気で渡り合うには、武力も必要であると悟りました。だから、御二人には護衛としてPFRS本部まで一緒に来て欲しいんです」
モニターに映る海上の巨大建造物……テロップには『PFRS本部施設』の文字が。蒼神博士は真剣な表情でモニターをビシッと指差した。

「おおツ、肉だ！ しかも国産牛肉だ！ あたしの勝利だあああああああッ！」

何に勝ったかは知らんが、冷蔵庫に上半身を突っ込んでナースが喚いている。

「ええつとですねエ、まずはコレに数字を書いて欲しいワケでしょい」

そう言って女医が紙切れを一枚取り出し、博士の前に差し出した。紙切れには『給与明細書』と書いてあった。手書きで。

「……ギャラですか？」

「いかにも」

「いや、でも……成功報酬は調査が完了し、必要経費が明確になつてから請求書が送られてくるとサイトに……」

「え〜と、うちの上司はこの件もちろん知らないワケで、バレルと解雇。で、博士と仲良く契約。現金直接プリ〜ズ」

要するに詐欺だ。

「不勉強で申し訳ないんですが、こういう調査一連の相場って、幾らほど……？」

「相場？ んんツ？ ねえーツ、咲チャーン！」

トントントントン、グツグツ、ジュワァァァ……

キッチンの方から手際の良い音が聞こえてくる。

「何じゃい！？」

「わたし達の仕事って、幾らぐらいもらえるのかなア？」

「こりゃ！ 子供がお金の話なんてするもんじゃありませんッ！

それよりこつち来て手伝いなさいッ！ 今日のランチはステーキだぞッ！」

今からでも遅くない、通報しよう……博士は心底そう思った。

<今回派遣される調査班には、情報機関の関係者が含まれているとの報道もあり、極秘裏に開発された、BC兵器による事故の可能性も視野に入れているのでは、との声もあります。PFRSのオーナー・『魅月紫苑』氏が昨日行いました、記者会見の模様をご覧ください>

攻撃的で鋭い目つきをした、顔色の悪い男性がモニターに現れる。50代前半くらいだろうが、徹夜明けの営業マンみたいにスーツをヨレヨレにしている。

<皆さん御存知の通り、PFRSの本分は新薬開発のコンサルタン

トと軍用兵器の設計であります。マスコミの間で流布されている正体不明のウイルス漏洩や、軍部の陰謀説などは事実無根です。PFRSは創立から20年程の若い企業のため、社会的に至らない箇所もあるかもしれませんが、国民の皆様にご貢献できるよう、日々努力しております>

<先日の元職員による告訴撤回に関しては、どう御考えですか？>
<企業が大きくなれば、必然的に賛同者と反対者の区別が生まれ、後を絶ちません。今回はその愚かな輩が、ギリギリで自分の過ちに気付いたという次第です。もちろん、法廷に立った場合、我々は徹底抗戦する準備ができています。正しい者は決して逃げ隠れしない。記者達の質問に対し発言する中年男性は、自信に満ちている。>

「この男がPFRS本部における元上司です」

博士は溜め息まじりに呟いた。

「フムフム。つまり、この不健康そうなオヤジが敵のボスか。モグモグ」

テーブルにはステーキ定食が二人前。家主の同意は無視。

「『敵』って……ボクはただ、PFRSの隠蔽体質を糾したいただけです。直接的な交戦なんて考えてません」

というより、この二人に一流SPのような働きを期待しても仕方ない。PFRSのバックには軍部がいる。物理的交戦となれば、特殊部隊の一個大隊くらいは必要になるだろう。

<今回の告訴内容についてお聞きしても？>

記者の一人が核心に迫る質問をした。

<告訴の内容については彼女に詳細を説明してもらいます>

カメラが移動して、魅月氏の隣に座る白衣姿の女性を撮る。

ブウウウウウウウウウウ

ツツツ！！

冷茶を飲んでいた博士が盛大に吹いた。噴射の反動で仰け反った。

虹が出来た。

「こりゃああああッ！ 食事中に行儀の悪い子だねえ！」

ナースがプリプリ怒ってる。

<告訴の件にしましては、原告側との和解が成立しております。本件は軍内部の情報が扱われているため明言は避けませんが、今後は軍部の広報より随時皆様に御報告があると思われます>

房状の後れ髪が特徴的な黒髪のポニーテールで、フォックスタイプの赤縁眼鏡をかけている。テロップには『PFRS上級職員・34歳』と出ており、名前は何故か伏せられていた。

<軍部の機密事項に該当するということですか？>

<そうです>

<責任者はどなたですか？>

<私からは御答えできません>

名無しの美女は記者の質問を突っぱねる。蒼神博士はやりきれない表情で、テレビの電源をオフにした。

「ボクのIDは当然もう使えません。つまり、PFRS本部に潜入するワケですから、政府施設への不法アクセスの罪で逮捕されます。それを踏まえた上で判断していただきます……同行できますか？」

正直なところ、この二人には来て欲しくない。手違いとはいえ、こんな未成年の女の子に犯罪の共謀者という履歴を加えたくない。だから、博士はトドメに言及した。

「1週間前、ボクはPFRSが送り込んできたヒットマンに襲撃されました。武装した刑事達がたくさん殺されました。ボクはこうして運良く難を逃れましたが、次も上手く回避できるという保障はありません……それでも一緒に来てもらえますか？」

誇張しているつもりはない。事実をありのまま真剣に述べた。

「えッ……人が死んでんの？ ええつと、それはちよつと……ねえ？」

「アハッ、ハハッ……補欠の初仕事にしてはハードかも（汗）」

二人は微妙に気まずい空気を漂わせ、目を見合わせている。

「どうされますか？」

彼は矢継ぎ早に追い立てる。

「え？ あ、ああ……ちよつとごめんなさい。事務所に戻って上司と相談してみます」

「そ、そうだよね……契約書類も持ってきてないし……アハッ、アハハハ（汗）」

両エージェントは引きつった笑顔で立ち上がり、玄関の方へと後退して行く。

「あの……上司に経過報告を入れなきゃならないんですけど、明日はどちらに？」

半開きにした玄関戸から、顔だけ出してナースが問いかけきた。

「東部ベイエリアの港に行きます。ソコから客船に乗りこみます。

周囲に一般人が多ければ、先方もあからさまな行動には出られないでしょうし」

「そうですか……じゃあ、また！」

バタンッ！

帰った。

「さて……と」

博士はもう一度テレビの電源を入れ、モニターを見つめた。記者会見のニュースはまだ続いているが、オーナー・魅月氏と白衣の女性の姿は無く、広報の人間がつまらない言い訳で凌いでいる。

「結局、ボクだけか……」

孤独な戦いへと前進する決意をかためた。

成長パターンを経て、多細胞生物に変化>

< 記者者不明……神の設計図バイタルズを管理する海底エリアの監視モニターが、異常を確認。特定の上級職員との接触の際、原因不明の振動現象が発生。電気的な反射と思われる>

< 記者者不明……軍部より極秘のアクセス有り。神の設計図バイタルズを軍のP4施設にて預かりたいとの依頼。私は反対した。一部の組織が秘密裏に所有して良い物ではないと判断。協議の末、極地に研究施設を整え、隔離するという決議案が採用される。これは軍上層部から紹介された将校からの提案で、建設費用の全額負担を申し出たらしい>

「コレのせいでボクは職を失った……」

彼は短い黒髪をガシガシとかき上げて目を細めた。これから自分が成そうとしている事を、常に心の中で自問し続けなければ落ち着かない。そんな時間がやたらと増えた。

（ボクは殺されかけた……そう、殺されかけたんだ。また表に出ようとするれば、軍が本気で動くかもしれない……拉致？ 殺害？）

ハアアアアアア……

とても重くて長い溜め息が流れた。

（一個人が大組織に勝てるのか？ ……可能か？）

パターンツ

PCを閉じた。面前に広がる自分とは無関係な光景に溶けてしまいたかった。

水着のセレブがはしゃいでいる。

プールサイドを無垢な子供達が走り回る。

日光浴に、彩色豊かなソフトドリンク。

デッキブラシでせっせと掃除するシスターと神父。

水平線の向こうには………

「て、アンタ等何やってんですかッ!？」

鼻息を荒げる蒼神博士が二人の前に仁王立ち。

「密航ッ!！」

二人はそう言った。

ゴシゴシ……ゴシゴシ……

孤独になるハズの旅に汐華咲と柏木茜がプラスされた。

「何じゃこりゃあああああああああッッッ!？」

バカが一匹、客室で絶叫した。

「シヨック・ザ・神の僕!！」

続けて二匹目。

蒼神博士は再会してはいけない連中を引き連れ、自室に戻った。

あのまま二人を世間様にさらしてはいけない……そんなオトナの真心から。で、入室するやいなや、冷蔵庫に頭を突っ込んでるのが汐華咲（何故かシスター姿）。身長は160センチ前後くらいで、非常に短く切りそろえた黒髪が特徴的。衣装のせいで体格はよく分からないが、スリムっぽい。一方、寢室のマットレスを寝転んで吟味しているのが柏木茜（何故か神父姿）。背丈は咲より頭一つ分くらい高く、栗色をしたミディアムの姫カット。衣装の上からもハッキリ分かる腹部ポツコリさん。体脂肪率は40%くらいありそう。

「……………で、どうして密航なんか？」

「ぬッ、神々しい生肉を発見！ダイレクトにいつてくれる!！」

「ふにや〜、たまんな〜い」

人の話を聞け。そして、牛肉に塩をふるな。

「会社に報告しなかつたんですか？」

「しましたよ。きつちりと」

「じゃあ、どうして!?! 死人が出ているんですよ!！」

「上司からは“だったら死んでこい”って言われました」

「……は？」

「つまり、死ににきました」

開封済のワインボトルを握り締めながら、シスターが胸元で十字を切る始末だ。こうなってしまっただけは、この二人同伴でPFRS本部へ潜入するしかないワケで……。

「いいでしょう！ こうなってしまった以上、今からボクはアナタ達の正式なクライアントです。よって、ボクの言うことは絶対守ってもらいますッ！」

ゲッフ……

ブツ……

ゲッフはするし屁はこくし、最低の返事が返ってくる。

「まず一つ！ ボクの指示なくして勝手な行動をとらない！」
ビシッと人差し指を突き出して一喝。

「二つ！ 御二人にはPFRS本部の手前で本土に帰ってもらいます！」

ビシッと二本目の指を立てる。

「神に誓って！」

「右に同じ！」

うわああああ………コイツ等、約束破りたくてウズウズしてる。

（巻き込んだのはボクだ………責任は負う）

彼は人並みに保護者としての責任に似たモノを感じていた。

「そういえば、ギャラの交渉が途中でしたね」

旅行カバンの中から財布が取り出された。ブ厚い。札を入れる部分がやたらブ厚くなっている。援交っぽい画になってなんかイヤらしい。

「スゴイよ咲ちゃん！ お財布がピッチピチで苦しそう！」

「おのれッ、この非国民めッ！」

床に正座して、天に両手を差し出しつつも文句をたれるシスター。

「ええつと……そういえば、幾らくらい払えばいいんですたっけ？」

「スンマセン、質問があります」

質問したら質問で返された。

「はい、何か？」

「大きな数字つてよく分からないんで、物に換算した場合……上カ
ルビ何人前食える？」

「執事喫茶何回通えますウ？」

「そんな価値基準でいいのか？」

「……では、依頼料の件は後日イレギュラーと交渉ということだ」

カチャカチャ、カタカタ……

蒼神博士はPCをテレビにつないだ。

「よく観ていてくださいね」

テレビモニターに映し出されたのは、海洋に浮かぶ正方形形状の巨大な環境都市。その中央には、黒光りする高層ビルがそびえ立っている。

「当時はまだ実験段階だった『マリソコロニー』のシステムを導入し、PFRSは4年かけて建造されました。資金の殆どを軍部がバックアップしているため、全ての設備が軍仕様で、テロリストやハッカーへの対策は万全。海上・空域ともにレーダー探知されており、認証コードを持たない所属不明の機体が接近すれば、即座に軍へ通報されます」

「あたしの知り合いに、『夜のレーダー技師』って呼ばれているヤツがいます」

「そりゃただのストーカーです。」

「かと言って、海中は広域海底火山の影響で巨大な岩が出っ張り、潜水艦による接近も難しい」

「わたしの知り合いに、『夜のソナー技師』って呼ばれているヤツ

がいます」

そりゃただの盗聴マニアです。

「そこでボクの立案した作戦ですが、PFRS本部から最も近い港には、メンテナンス用の海底トンネルが本部の発電施設までつながっています。そこを歩いて行きます」

「はいはい、警備とかは？」

「問題ありません。海底トンネルの存在は、政府が契約する特定の業者と、一部の上級職員しか知りません。ただし、ボクのIDはどうせ使えないんですけど」

「つまり、あたし等は海底トンネルの出口まで付き合えばいいってコト？」

「でもオウ、IDが無効ってことは入り口で立ちんぼ？」

「大丈夫です。政府指定の業者の一人が、ボクの話聞いて協力してくれることになりました。港で落ち合う予定です」

彼の心の中で、まだ弱々しかった決意がギュッと引き締まった。

「で、具体的にPFRSとやらで何が起きてるんですウ？」

神父もワインのボトルを発掘し、それはもう手慣れた感じでグビグビグビッ。

「このバカ！！」

ばしッ

「あうッ！！」

シスターが神父をぶつ。そして、小芝居。

「飲酒はハタチを過ぎてからって、いつも言ってるでしょ！」

「ご、ごめんなさい……わたしが間違ってた！ 久しぶりの合法的な食事にうかれてた！」

ヒシッ

抱き合う酔っ払い共。シスター、オマエも未成年だぞ。

「PFRS本部ビルのP4施設で、バイオハザードの一種が発生しています。職員十数名が、正体不明の『何か』に感染しました。本部はその事実を隠蔽しているのです」

蒼神博士は面前の小芝居をバツサリと無視し、話を進める。

「それ以外にも、国外から不法滞在者やホームレスを拉致し、違法な人体実験を行っています。私も立ち会ったことがあります……遺体は溶解処理され海に流される。被験者の個人情報も、この世から全て消されます」

「ほう、そりゃけしからんな」

腰に両手をあてて窓から大海原を眺めるシスター。その背中はずんずんと揺れている。酔っ払ってるけど。

「バイオハザードの原因は、『神の設計図』バイタルズにあると推測しています」

モニターに映される怪物体。

「ばいたるぞ？ 若手か？」

芸人ではありません。

「『神の設計図』バイタルズとは……20年程前、現在のPFRS本部が位置する海域にて、地殻変動により海底から吐き出された正体不明の遺物です。人間の造形と酷似していて、半透明の全身には人体を構築する組織全てが正しい位置に在り、電子顕微鏡を使用してはじめて確認できる、微細な箇所まで正確に造られています。つまり、『人類の完璧な標本』バイタルズ。いえ、コレを最初に精密検査した科学者は、『人類を創り出すための完璧な設計図』と考えました」

モニターに映った怪物体をジッと見つめる咲と茜。そして、感想。

「男？ 女？」

「大人？ 子供？」

特にどうでもいい様子。

「先日も申し上げましたが、ボクはヒットマンの襲撃を受けました……この船も100%安全というワケではありません」

「はッはッはッ！ そのためのあたし等です！」

「博士の盾となり武器となり、情婦となりますウ」
結構です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2973z/>

考えろよ。

2011年12月14日13時48分発行